

沫雪

〔物類稱呼天一〕雪ゆき、東武にて綿帽子雪といふを、西國にて花びら雪と云、中國にてべたれ雪と云、越路にてぼた雪といふ、上總にてぼたん雪と云、雲州にてだんひら雪といふ、又ほろく降る雪を、越路にてはだれ雪と云、

〔倭名類聚抄一〕沫雪、日本紀私記云、沫雪阿和其弱如水沫、故云沫雪也、原書有脱、字據一本補、

〔類聚名義抄七〕沫雪アハユキ

〔袖中抄十六〕あは雪

まはすにはあは雪ふるとまらぬかも梅の花さくつ、みてあらで集八萬葉

顯昭云、あは雪とはきえやすき雪也、世人春雪とおもへり、まかれどもいまの歌もまはすにふるといへり、冬も春もよむべし、

〔東雅天一文〕雪ユキ略中 アハユキといふ事、舊事紀に、日神素戔嗚鳥神の天に昇給ひしをむかへ給

ひし時、踏堅庭而陷股若沫雪蹴散し給ふといふ事の見えしを、日本紀も其文によられ、古事記に見えし所もまた異ならず、倭名鈔に沫雪の字をまゑるし、讀てアハユキといひ、日本紀を引て、其弱

如水沫と註せり、これ私記の說なり釋日本紀にも、師説を引て釋せしところ、亦これに同じ、世人これらの説によりて、沫雪とは春雪をいふなりともいひ、又冬のはじめ降れるをもいふなりなど、いひ傳

へたれど、萬葉集の中には、冬の歌にあはゆきを讀しあまた見えて、特には、まはすにはあはゆきふると知らずかも梅の花さくつばめらんして、とよめる歌あり、世の人の説しかるべしとも思

はれず、沫雪といふものは、たとへば雪の初まて作りて、いまだ華をなさざるが、つぶくとして水沫の結びたるやうにあれば、沫雪といひしなり、古事記の歌に、多タ久ク夫フ須ス麻マ佐サ夜ヤ具グ賀カ斯シ多タ爾ニ阿ア波ハ

由ユ岐キ能ノと見えしは、略中 其降れる音の、さやげるを云ふなるべし、さらば即今アラレといふ物にてあるなれば、ケハラ、カシともまゑるされたるなり、然を後の人、其義を誤解きて、其弱如水など